

Title	前号目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.11 (1956. 11) ,p.820(56)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561101-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

楠井氏は、コッジオレクが言うように、「生産的・非生産的の對決は一般的・抽象的なものではなく、歴史的に規定される」のだから、社會主義經濟では社會的に有用且つ必要労働は、生産的労働であるかまたはこの生産的労働のために必要または有用である故に間接的に生産的労働であるかのいずれかであり、したがつて物質的生産という點から分けることはできないのではないかと疑問をだされる。私も述べたことがあるように、この意見に賛成であり、野々村氏のように、物質的生産に役立つ、サーヴィス労働は生産的であるという如き分け方には同意できない。もし概念によつて明確な區別ができないとすれば、更によりき用具を作りだすことこそ必要なのではないか。資本主義の分析にとつてよりき用具であつた、マルクスの生産的の考へ方は、社會主義に妥當できるものであろうか。ここに第一次所得と派生的所得という總社會的區別が考えられるが、この方法とマルクス理論とをどう統一できるのか私には納得できない。

第二の點。社會的總生産物を一年間に生産された總價值とみる考へ方が一般的であるが、ポールが生産手段に價值のない社會主義ではこの考へ方は誤つていと述べたことは既に紹介した。これに對して名島氏は價值のない生産手段をいかにして價值で測定できるのかという疑問を述べられる。これについて野々村氏は、「ポールのいうように生産手段が價值をもたないとしても、現在のソヴェト社會においては、物財の計測もそして計畫化もまたすべて労働時間によらない。それは消費資料と同じ次元において貨幣的な計算をうける」としておられるが、これでは問題は解決していない。原價論争の重要な所以である。

昭和三十一年九月

三田學會雜誌 第四十九卷第十號

目次

論 說	
現代財政學に對する若干の疑問	高木壽一
一つの覺書	
労働供給に關する覺書	辻村江太郎
『保險と價值形成の問題』について	庭田範秋
所得税と消費税の厚生効果	古田精司
書評及び紹介	
J. A. C. ブラウン著『産業の社會心理』	中鉢正美
工場における人間關係	
サコフ『社會主義經濟的カテゴリーとしての原價』	加藤寛
經濟史發展の現段階	渡邊國廣
物價史の研究について	渡邊國廣
經濟學關係文獻目錄	

書評及び紹介

ジョン・サヴィル編

ドナ・トール女史記念論文集

『民主主義と労働運動』

Democracy and the Labour Movement,

Essays in Honour of Dona Torr, 1954.

—

イギリスにおける労働運動史や社會史の研究の現状がどうなつていくかについて、われわれは今迄充分知る機會に恵まれなかつた。世界の學界の片隅にあつて、現在の社會科學の中心的な課題となつていくものが何であるかを知るために、われわれは、續々と刊行される海外の出版物を、ひたすらたんに眼をとおしながら、わずかにその動向をさぐりあてるのが精々である。しかしながらそれさえ満足にできないというのが現實である。およそ學問というものを大切にしないこの國に生れた不幸は、内外のあらゆるすぐれた著作を、ゆつくりと讀ませてくれる餘裕を、經濟的にも時間的にもあたえてはくれない。日本の學者たち——とりわけ社會科學者たち——が、みづからその獨創的な學問的體系を形成するよりは、海外の文獻の應接に暇ない状態をみると、とくにこのことを深く感ず

書評及び紹介

五七 (八二一)

るのであつて、かく云うわたくし自身も、その例外でないことは云う迄もない。

ところで、最近のイギリスにおける労働運動史および社會史の研究にかんする水準を示すものとして、この『民主主義と労働運動』はもつとも注目すべきもののひとつではなからうか。これはジョン・サヴィルの編集によつて、ドナ・トール女史が、一九五三年七十歳を迎えた記念として、彼女の教えをうけた人々や、或いは日頃彼女を尊敬している人々によつて書かれた論文集であるが、執筆者の多くは、現在學界に活潑な活動をつづけている進歩的な學者たちで、多くはオックスフォードやケンブリッジ、或はグラスゴーやハルなどの大學のフェローやチューターをつとめている比較的若い世代に屬する俊秀であると思われる。

本書の紹介に入るまえに、ドナ・トール女史について、その序文ののべることを記しておこう。彼女は、一九二〇年、三十七歳のとき、イギリス共產黨の建設に参加した黨員であるというから、その政治活動の歴史はきわめて古いわけである。だが彼女は、ただ運動家として活躍してきただけでなく、また民主主義運動や労働運動の歴史にかんする研究者として知られている。すなわち彼女は、マルクスとエンゲルスの往復書簡を翻譯し編集したり、「マルクス主義、國民および戦争」という題目で、マルクス主義の古典的文献からの抜萃を編さんしたりすると同時に、今その畢生の大著となるべき『トム・マンの生涯』(The Life of Tom Mann, 2 Vols)を完成すべく努力しているといわれ、その公刊が期待される。この書の序文が、ジョージ・トムソン、モリス・ドップ、クリストファ